



なんとなく、1年前のデジャブのような光景。だっ広い格納庫、と言うより貨物庫だが、先に収容されたST1Bが一機。すでに医療チームによって乗員の手当が始まっている。エアシールドが周囲を覆って空気が満たされると、俺たちは船を駐機モードに切り替え、ハッチを開けて外に出た。

「久しぶりだな。元気そうだなによりだが、どうやら毎回、こういう遭い方になってしまみたいだな」

デイクが外で待っていた。

「いや、おかげで助かったよ。まさかお前が来るとはな」

「いや、俺も驚いたぞ。1年ぶりに太陽系に戻って、最初に会うのがお前らだとは思っても見なかったぞ」

フランクとデイクがそう言いながら握手をする。

「ほお、ちよつと面構えがよくなったな。フランクに少しは鍛えられたか」

デイクが俺の方に向けて言う。

「そうですか？ありがとうございます」

「でもまあ、それくらいじゃないと、美空の娘の相方はできんだろうがな」

「いや、それは・・・」

「ちよつと、ケンジ！なんか文句でも・・・？」

「あ、ありませんってば、美月さん」

「あっはっは、相変わらずだな。まあ、仲が良くてなによりだ」

「いったい、俺とこいつのどこが仲良く見えるんだろうか・・・。まあ、腐れ縁であることは否定しないのだが。」

「事故機のクルーの様子はどうですか？」

マリナが質問する。やはり、彼女にとっては、それが一番の気がかりなんだろう。

「ああ、大丈夫だ。うちのドクター、見かけは藪医者っぽいけど、あれでなかなかの名医だ。後遺症も残らないだろうと言ってたよ。もう少し遅れたらまずかったみたいだが」

「そうですか。よかった」

「そういう意味ではインターステラから応援を頼んだのは正解だったな。それに、ワープアウトゾーンの外に出てくれていたのは、俺たちにとっても助かった。もし、中に残ってたら、この船でもうかつには動けなかっただろうから」

「インターステラへの要請はフランク先生の指示でした」

「なるほどな。お前は昔からそういう判断が速かったよな。言い方を変えれば、あきらめが早いとも言えるが・・・」

デイクがフランクの肩を叩いて笑いながら言う。

「適切な判断と言って欲しいもんだな。だが、ワープアウトゾーンから、あの船を出せたのは中井の機転があったからだ。あそこで見失うのを覚悟でフル加速しなかったら、両方とも他の船に潰されてたかもしれないからな」

「なるほど。まあ、追い詰められた時には、案外、無茶してみるのがいいって話もある。そう言えば、一年前も、こいつらはずいぶん無茶苦茶をやったわけだし。だが、よく見失わずに位置をトレースできたもんだな」

「それは、このエイブラムスのおかげだ。近傍小惑星監視用の衛星ネットワークを使って追尾するなんて技は俺も考えつかなかったよ」

「エイブラムスって、もしかして例の奴か？センターコンピュータに侵入したとかいう」

「あ、先生、そんなこと言いふらしてたんですか？」

ジョージが頭をかきながら言う。

「なるほど、こいつがなあ。しかし、あれに侵入できる奴が学生にいたとは信じられんが・・・。でも、この練習機のソフトウェアの仕上がり具合を見たら納得もいくな。あれを一晚で仕上げたつてのか。たいしたもんだ。それに、ちゃっかりこっちのシステムものぞき見してたようだしな」

「あ、それは僕じゃなくて、こっちのサムですが・・・」

「なんだ、お前じゃないのか？俺が作った防壁を、さらっと3枚も破った奴だぞ？それだけでもハッカーとしての腕前は超一級だが」

サム、知らない間にそんなことまでやってたのか……

「でも、あそこまでが限界。次の防壁はトラップ……」

「おいおい、そこまで見抜いてたつてののか？こりゃ驚いたな。フランク、いったいお前はなんて連中を集めたんだ」

「集めたと言うより集まったと言う方が正解だな。いわば、類が友を呼んだ部類だろうな」

類友はひどくないっすか？先生。少なくとも、俺はいたってまともな学生のつもりなんです
が……

「こいつら、例のゲーセンのシミュレーションもクリアしやがってな」

「例のつて、あのSF2Aの奴か？クリアって、まさか、最後のおまけは無理だろう？」

「いや、あれもクリアしちまいやがった。ちよつと反則技だったがな」

「反則も何も、小型宇宙艇で巡航艦をやっつけたつてののか？どうやったらそんなことが出来るんだ」

「こいつが、システムを書き換えて、とんでもない飛び道具を仕込んだのさ」

「飛び道具？反物質弾頭でもきついでらう……まさか？」

「そうだよ。それもEMP付きだ。先にEMPで防御を封じてからドカーンさ。センターコンピュータはこの戦術の有効性を評価して、ライブラリに追加したよ。まあ、実際に使われることはないだろうがな」

「そんなシチュは、御免被りたいもんだな。しかし、お前も大変だな……同情するぜ」

「まあ、楽しんでるがな、俺も」

なんか、俺たちのこと忘れて話し込んでないっすか……？でも、たしかにこのチームは普通じゃ無い。一人一人の力もそうだけど、なんか、こう、しっくり来るといふか……

「せんせー、本人たちを前に何話してるんですかあ？こんなチームにした責任は先生にあるんですからねえ！」

「あんたね、こんなチームとは何よ！何か不満でも？」

あ、いかん。また始まった。

「いえいえ、不満なんて……。ま、こんな楽なチーム、他にないしね」

「そうですね、こんな楽しいチームは他にありませんから。私は大好きですよ」

「うんうん、そだよね」

「・・・」

マリナさん、うまく丸め込みましたね。さすがです。

「君らは、ナビとメデイカルか。まあ、二人は暇な方が平和だ。出番になったときは、結構ロクでもないことになってる時だからな。いや、でもまあ、既にそういう事態に巻き込まれるわけだがな」

デイクが笑って言う。

「とりあえず、パイロット二人とエンジニアリングは札付きだからな。周りはフォローが大変かもしれないが、頑張ってくれ。そういう意味ではフランクの人選は間違っていないようだがな」

「ふ、札付きですか？」

「そりやそうだろう。TS5型シャトルを無免許でアクロバット飛行させた新生と、セキユリティは完璧と言われていたアカデミーのセンターコンピュータに侵入した一年生、どっちもアカデミー始まって以来の騒ぎだからなあ。同窓会でもその話で持ちきりだったよ」

フランクも楽しそうに言うのだが、たぶん、色んな噂に尾ひれだの、背びれだのがつきまくって、大変なことになってるに違いない。なんとなく憂鬱だ。俺は平凡な人生を送りたいだけなのに・・・

「さて、ここで話し込んでいても仕方が無いな。とりあえずブリッジに上がろう。船長に会ってから、ゆっくりするといい」

「船長も久しぶりだな。最後にあったのは、俺がベテルギウスに行く前だから、もう何年になるかな。かつての鬼教官もずいぶん丸くなったなと思ってたんだが」

「まあな。俺たちの歳を考えれば、そういうことだろうよ。お前が教官をやってる時代だからな。世も末だ」

「おいおい、生徒の前で、なんてことを言うんだ。あんまり余計なことは言うなよ」

かつての悪友。そんな感じの二人である。これに美月の両親が加わって、いったいどんな学生生活を送っていたのだろう。そんなことを考えながら、俺たちはデイクと一緒に移動用のカーポートに乗り込んだ。ちよつとした運動場くらいの貨物庫。それが何個も連なっているから、歩

いたら、向こうの端までどれくらいかかるか分からない。相変わらず人気のない船内は、作業用ドロイドだけがせわしく動き回っている。この巨大な貨物船を僅か数十人で動かしているわけだ。

「ありゃあ、ぜんぜん人がいないねえ。幽霊船みたいだよ」

「貨物船はほとんど自動化されてますからね。それに、たくさん人がいると、その健康管理や生命維持だけで大変ですから」

そういえば、去年、俺と美月もよく似た会話をしたな。まあ、こういう穏やかな会話とはほど遠かったが……。

「そうそう去年、ケンジったら、この船に何百人も人がいると思ってたのよね。バカみたい」

「おい、昔の話を持ち出すなよ。普通、素直にそう思うだろ」

「まったく、子供じゃあるまいし。アカデミー附属高に入ろうって人間が言うこと？」

「ほっとけよな」

まったく、同じようなタイミングで思い出しやがって……。

「そっか、去年もこれに乗ってるんだよね、お二人さんは」

「そうよ、まさかまた乗ることになるなんて思っても見なかったけどね」

「まあ、見かけはボロいが、住めば都だ。卒業して就職先がなかったら拾ってやってもいいぞ」

「遠慮させてもらうわ。そもそも、それまで動いてるかどうかだっただけじゃない」

おいおい、美月、ちょっと言い過ぎだ。

「手厳しいな、お嬢さんは」

デイクが苦笑いをして言う。

「俺の苦勞もわかるだろう？」

フランクがぼそっとつぶやく。いや、たしかに大変だろうとは思うけど、生徒の前で言わないでほしいんだが……。

そんな話をしているうちに、カートは貨物エリアの端まで来て止まる。ここからリフトでブリッジまで上がるわけだが……。

「よし、そこから上に上がろう」

ダイブとフランクが先にリフトに入る。リフトと言っても見てくれは単なる光の筒だ。重力制御による昇降シャフトといった方がいいだろう。なので……

「じゃ、俺たちは先に……」

と先に行こうとしたら

「なんか楽しそう。お先っ！」

とケイが先に乗ってしまう。俺は……見てはいかん、と思いつつ、ちょっと上目遣いに……

「このエロケンジ、何みてんのよ！」

とパンチが飛んでくるわけで……。だから先に行こうとしたのに……。だいたい、スカート姿の女子が乗ることなんか、このリフトには想定外なわけで。これもまた、去年のデジャブ。去年は、俺がそれに気づかず、美月を先に行かせようとしてパンチを食らったわけだが……。

「あれ、なんで来ないの？ なかなか見晴らしいよ〜」

ケイが上から叫ぶ。いや、こっちの見晴らしもなかなかいいのだけどな……

「バカね、あんた、丸見えじゃない！」

美月が下から叫ぶ。

「え？……あ〜っ、こら見るな〜！」

ケイが慌てておしりを押さえる。だがもう遅い。白……。だったか……

「危なかったですね。美月さん、気がついてくれて助かりました」

「これは危険。そもそもこの格好はこの船では想定外だから。でも、白は意外……」

「そうよね。意外だわ」

サム、それ言っちゃっていいのかよ？ 美月も納得してるし……。まあ確かに、あのケイが白つてのは、俺も意外ではあるが……

「こら、バカケンジ！ なにニヤニヤしてんのよ。さっさと先に行きなさいよね。上は見るんじゃないわよ！ わかってるわよね！」

いや、見ませんってば、美月さん。

「ジョージ、行こう」

「ああ。確かに、このリフトはこういうことは想定してないよね」

そう言いながら、俺たちは二人でリフトに乗る。アウトバンドで出てくる行き先表示でブリッジを指定すると、体がふわっと浮いて上がっていく。加速をほとんど感じないので、逆にちよつと違和感がある。しかし、上は見られないし下を見れば美月と目が合うので、なんとなく視線のやり場がない感じだ。美月とマリナも続いて上がってくるが、美月は去年同様におしりのあたりを気にしている。そう言えば、去年はリフトを降りた後で、デイクに監視カメラがどうとか、さんざんからかわれたからな。それも気になるんだろう。

「ケンジ、もしかして白いの好き？」

リフトを降りたらいきなり……。だ。

「え、いや、その……」

「あ、やつぱり、みいゝたあゝなあゝ」

ケイ、それは卑怯だ。確かに白いのは……。見たが……

「でもいいよ、ケンジなら。今度、好みの色教えてくれたらあ、サービスしちゃうからねえ」

「おい、俺はそんな趣味ねえって！」

「えー、あ、まさか、まさか、無しがいい……。とか言わないよねえ。それは、ちよつとハ

「ドル高いから」

「……………」

俺が答えに窮していると、後から……

「何の話してんのかしらねえ……」

いつの間にか、美月が後にいるわけで……

「ケンジは白が好き……って話だよ」

「おい、何の話だ！」

「まったく懲りない奴ね。去年も危ないとこだったわ」

「なんだ、見せてないのかあ。残念だったねえ、ケンジ」

「おいっ！」

まったく、こいつらときたら、俺をなんだと思ってる。

「ほお、今年は二人が相手か、なかなか元気がいいじゃないか」

ダイブが横から茶々を入れる。いや、俺だって好きでやってるわけじゃないから。

ブリッジは去年とにも変わっていない。大昔の帆船のブリッジを思わせる、アンティークな飾り付けや、大きな操舵輪。全部、この船の船長の趣味だ。もちろん、そんなものは飾りに過ぎない。実際の操船は全部、インターフェイスを経由して行うのだから。

「へえ、なかなかシブいじゃん。骨董品だね」

「地球の18世紀から19世紀のデザインですね」

「昔はこんな仕掛けで船を操ってたのか。今度、シミュレーション作ってみようかな」

なんとなく意外な感じだが、みんなこのブリッジが気に入ったらしい。

「気に入ってもらえたかな」

気がつくとも船長が立っていた。突然そこに現れたみたいで、ちょっと俺はびっくりしたのだが。

「先生、お久しぶりです」

「おお、フランク・リービスか、何年ぶりかな」

「私がベテルギウスに行く前ですから、かれこれ10年くらいですかね。お元気そうですね。よりです」

「君の論文は読ませてもらったよ。さすがだな。赤色超巨星の崩壊過程のモデルを書き換える画期的なものだ。だが、あれが正しければ、ベテルギウス星系の最後はそう遠くないことになるな。オリオンの左肩が吹き飛ばせば、周囲に大きな影響が出るだろう。なにより大昔から親しまれた星座が変わってしまうことになるのは寂しいが」

「ありがとうございます。心情的にはあの予測が外れて欲しいと思っただけですけどね。ただ、準備は早急に始めた方がいいだろうと思ってます」

「そうだな。極方向以外でも半径数十光年の範囲には大きな影響が出る。重力崩壊によるワープへの干渉もあるだろうから、しばらく航行もできんだろう。極方向のガンマ線バーストはもっと要注意だ。こいつは数千年にわたって航路図に通過している座標をのせないといけないだろうな」

「そうなりますね。極方向にある有人惑星系は、惑星規模の対応が必要になりますから。幸いにも爆発がわかってから、最も近い星系でも数十年の猶予はありますから、経路上に大規模なガンマ線シールドを構築する余裕はあるでしょう」

超新星爆発は、宇宙で最も壮大な現象のひとつだ。ましてや、ベテルギウスのような巨大恒星の最後に出会える確率はきわめて低い。人類社会にとっては、幸か不幸か・・・ということになるが、科学者としては最大級の幸運に違いないだろう。それに、ワープが一般的になっていく現在、超新星爆発はリアルタイムで把握できる。一方でその影響は光の速度でしか伝わらないから、対応のための時間は十分稼げるのである。地球から見た星座が変わるのも、実際は数百年後だ。

「先生、ベテルギウスも爆発するとブラックホール化するんですか？」

ケイが質問する。

「いや、星自体が大きすぎて、爆発の過程で多くの質量を失うために、ブラックホールになるほどの質量は残らない可能性が高いと考えられている。たぶん、後には中性子星が残っていわゆるパルサーができるんだろうな」

「そっか、でも、どちらも航路図上は接近注意区域には違いないなあ。面倒だ」

「面倒って、あんたね、自分の都合でしか考えてないわけ？」

美月がすかさず突っ込むのだが・・・。

「当然よ！ だつてうちのパイロットは鉄砲玉だから、ナビが気をつけとかないとどこに飛んでくかわからないからね」

「あんたね、それどういう意味よ。そもそも、太陽系内の航路じゃナビの仕事なんてほとんどないじゃない！」

という感じで、また火がつくわけで・・・。

「こら、やめないか。パイロットとナビが喧嘩してどうする」

「なによ、ケンジ。こいつの肩持つわけ？」

「当然、ケンジは私の味方だよね」

いや、俺はどちらの味方でもないのだが・・・。

「ほらほら、そこまでだ。なんだかん言いながら、君らはうまくかみ合ってると思うぞ。今回だつて、二人とも自分の仕事をきちんとこなしたから、うまくいったんじゃないか」

フランクが言う。

「そうですよ。私から見てもコース計算と操縦のコンビネーションは抜群でしたから。それはお互いにわかってるんじゃないでしょうか」

「そうそう。喧嘩するほど仲がいいっていうしね。後はリーダーがしっかりまとめてくれれば・・・だろ、ケンジ」

え、最後は俺かよ。マリナはいいとして、ジョージの一言は余計な気が・・・

「まあ、リーダーが大変だつてのは認めるが、それは仕事だから仕方が無いだろうな」とフランク。いや、そもそも俺をリーダーに据えてしまったのはあんたでしょうが。

「さて、修羅場かハーレムか・・・そこは考えどころだぞ、中井」

とデイクが笑って言う。いやいや、俺はどちらも嫌です。って、違っだろう、話が！

「ともあれ、この船は一旦、L2に立ち寄って、君らともう一機を下ろしてから地球に向かうことになる。この位置からなら、速度制限もほとんどないから、2時間もあればL2に入るだろう。短い時間だが、ゆっくりしていくといい」

「L2にはどれくらいいるんだ？」

「本来ならすぐに地球軌道に向かいたいのだが、事故調がてぐすね引いて待つてるだろうか、一日くらいは足止めだろうな」

「そうか、申し訳ないな。巻き込んでしまっって」

「宇宙じゃ、お互い様だ。気にするな」

昔から船乗りがそうであるように、宇宙船乗りにも、遭難船の救助を最優先するという不文律がある。緊急連絡があれば、近くの船がすぐに駆けつけるとするのが基本だ。とりわけ、救助体制が手薄な恒星間空間では、そうした救助の多くを宇宙船同士の連携に頼らざるをえないのである。

「しかし、2時間くらいと言っても、ちょっと中途半端だな。アプローチ作業の開始は30分前くらいには始めたい。それまでの間なら、少しこの船を案内できると思うが、どうだ？」

「そうだな、デイク。学生諸君もいるから、それがいいだろう」

デイクの提案に、そう船長が付け加えた。

「それはありがたい。こいつらにも、いい勉強になるだろうから。そうだ、デイク。君の自慢のコンピュータシステムをちょっと見せてやってくれないか」

「おっと、そうきたか。なんだかんだ言いながら、お前が見たいんじゃないのか？フランク」

「まあな。正直言うと、話を聞いて、一度見たいとは思っていたんだ」

フランクが笑いながらそう言う。

「いいだろう。まあ、出来のほどはともかく、自分が手間暇かけた代物を人様に見てもらっても悪くないからな。こっちだ、ついてこい」

デイクはそう言うと、ブリッジの奥にある小さなドアに向かった。